

第7章 コンピュータを利用した文学研究の 新たな手法獲得に向けて

7-1 研究の応用可能性

本章は、研究の応用可能性を探るために、文学作品をハイパーテキスト化する際の変換手法と試作の評価方法を確立するために行った研究から派生してコンピュータを活用する文学研究の新たな手法を示すことを目的とする。

第6章における因果型文学テキストのハイパーテキスト変換と評価方法の検討は、第5章の成果に基づき、[2]及び[33] [34]を発展させて、宮沢賢治の「注文の多い料理店」を原テキストとし、原テキストの論理構造と修辞の構造を明らかにすることによって、小説をハイパーテキストへ変換する手法を示したものであった。試作ハイパーテキストの評価は、精度と再現率を要約する F 値を指標として 15 種類の絵本をはじめ他の表現形態との比較によって行っている[88] [89] [90] [91] [92] [93]。

電子化されたテキストの評価にあたっては、従来一定数の被験者に対して読書時間や読解のプロセスを比較するなどの手法を取ることが一般的であった。本研究においても第4章で同様の評価方法を採用したが、その際には被験者の文学的経験など重要な背景情報が捨象されてしまう。また、書籍等の紙媒体とディスプレイ装置による読書を比較するのは、テキストの内容ではなく表現手段やデバイスの優劣を被験者の感覚によって問うことにす

ぎないと同じく第4章で指摘しておいた。

そこで、ハイパーテキストと従来の表現方法による作品とを修辞の面から比較する手法を模索することとし、比較対象として様々な表現形態を取る作品を網羅的に調査し内容分析を行ったのが第6章である。予備的な調査を行ったところ「注文の多い料理店」は、絵本の出版点数が多くコミックやアニメも制作されていることから多様な表現手法を比較する目的に合致していることが判明した。

このようにして研究を推進したが、網羅的な資料の収集により「注文の多い料理店」の受容史にもささやかながら寄与することが可能と思われる成果を得たので以下に示すこととする。本章では、テキストに対してあくまでも表層的な検討を行う。表層的な研究によってこれまで示された様々な研究成果を補うことにもなり、新たな視点を提供することが可能であることを示すのが最大の目的である。

Franco Moretti は、広範囲に渡るテキストの解釈ではなく、文学の一般的なモデルを得るためにグラフ、地図、樹状図を用いて地理学と生物学の手法を援用することを宣言して文学の論文に様々な図表を取り入れた[70] [71] [72]。個別のテキストと関わっているのは全体像の把握など不可能だという考え方である。これに対して従来の文学研究が不可能であった「作る」という観点に迫ることを目的としているハイパーテキスト変換の研究は、個別テキストの表層的な分析という極めてミクロな場面から出発している。それでも以下で述べるようにグラフ、地図、樹状図を示すことは可能である。

7-2 実証的な研究手法の導入

ハイパーテキスト変換の研究では試作と比較する他の表現形態について、原作初版本以来国内外で公表・公刊された当該タイトルによる作品を網羅的に収集調査した。資料収集のために、国立国会図書館目録 (NDL-OPAC)、国際子ども図書館児童書総合目録、大阪府立国際児童文学館蔵書目録等のオンライン目録の他に[31] [68] [69] [99]に依拠し、映像作品については[134] [151]を使用した。研究の性質上、目録情報を抽出するのみではなく作品の現物にあたり「注文の多い料理店」が収録された同名の童話集初版本 (1924年) 以来 2003年末に至るまでに公表・公刊された総数 241 点の分析作業を行った。

比較対象の表現手段における特性は、文字・画像・音声の3要素に基づいて既に 6-6 節で図 6-2 及び図 6-3 にこれらをまとめて分類した。

収集した資料を具体的に分類すると以下のようになる。

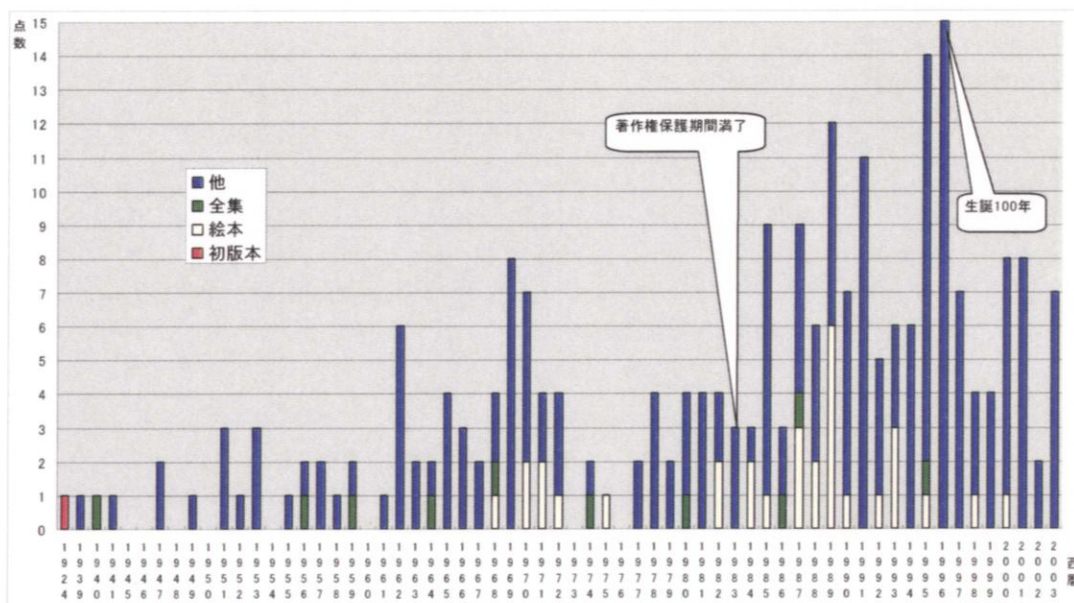
- 文字
 - 全集, アンソロジー, 文庫
 - リフィル
 - 大活字本
 - 翻案
 - 翻訳
 - 戯曲, 台本
- 画像
 - 絵本
 - 翻案絵本
 - 紙芝居
 - コミック
 - アニメーション
- 音声
 - 朗読 (レコード・カセットテープ・CD・朗読ビデオ)
 - 音訳
- 複合
 - CD-ROM (インタラクティブ絵本)
 - Web

7-3 出版点数の推移<グラフ>

宮沢賢治のテキストを出版史から考察する際には、著作権と著作権法の変遷、旧かなから新かなへの移行、全集ブーム、占領期における検閲などが視点として想定できる。

図 7-1 に示したのは、暦年ごとの出版点数の推移である。全集、絵本の刊行年と点数を際立たせるために表記を積み上げ棒グラフとした。財産権の保護期間と初版本出版以来の 10 年を加えて 60 年間の出版点数は、累計で 95 点、年間の平均刊行点数は 1.58 である。これに対して保護期間終了後から 20 年間の出版点数は累計 146 点、年間平均刊行点数は

7.30 で年数としては三分の一の期間に 4.61 倍と急増している。生誕 100 年を迎えて活発な出版活動が行われたことが影響していたことは明白であるが、特に絵本の点数が急増していることなど、保護期間の前後で大きな差異を示している。



<図 7-1：「注文の多い料理店」出版点数の推移>

<表 7-1：著作権法改正による保護期間の延長>

暦年	保護期間の終了年	保護期間
(旧法)1934～1962	1963	30 年
1963(旧法改正施行)～1965	1966	33 年
1966(旧法改正施行)～1967	1968	35 年
1968(旧法改正施行)～1969	1970	37 年
1970(旧法改正施行)	1971	38 年
1971(新法施行)～1983	1983	50 年

現行著作権法による文学作品の著作（財産）権保護期間は、作者の死後 50 年である。宮沢賢治の場合は、1983 年末で保護期間が終了している。各種の目録を手がかりとしてこれまで確認できた「注文の多い料理店」の出版点数は 2003 年末までに 241 点である。

1933 年以降を没年とする作家は、表 7-1 に示したように数次に渡る旧法の改正と新法の

施行により保護期間が30年から50年へと延長されて来た。しかし空白期間は生じていないので、保護期間の変化と出版状況を対比して考察することには意義はない。この他に、旧法から新法への移行によって大きく変化したのは、翻訳権であった。旧法において翻訳権は他の財産権と異なる保護期間（公表後10年）と保護手段（自然言語別の保護）が講じられていた。「注文の多い料理店」が初めて翻訳されたのは、1967年でJohn Besterによる英訳であった。この年は依然旧法の時代であるが、保護期間は満了している。また、翻案としては、雑賀武夫による戯曲が1951年に出版されている。だが、旧法下では外国語への変換としての翻訳と原著作物の改編としての翻案を区別している所以他们は旧法第七条の規定には含まれない。翻訳権は主に外国人による作品を日本国内で翻訳出版する際に行使されるものと想定されていた[65]。

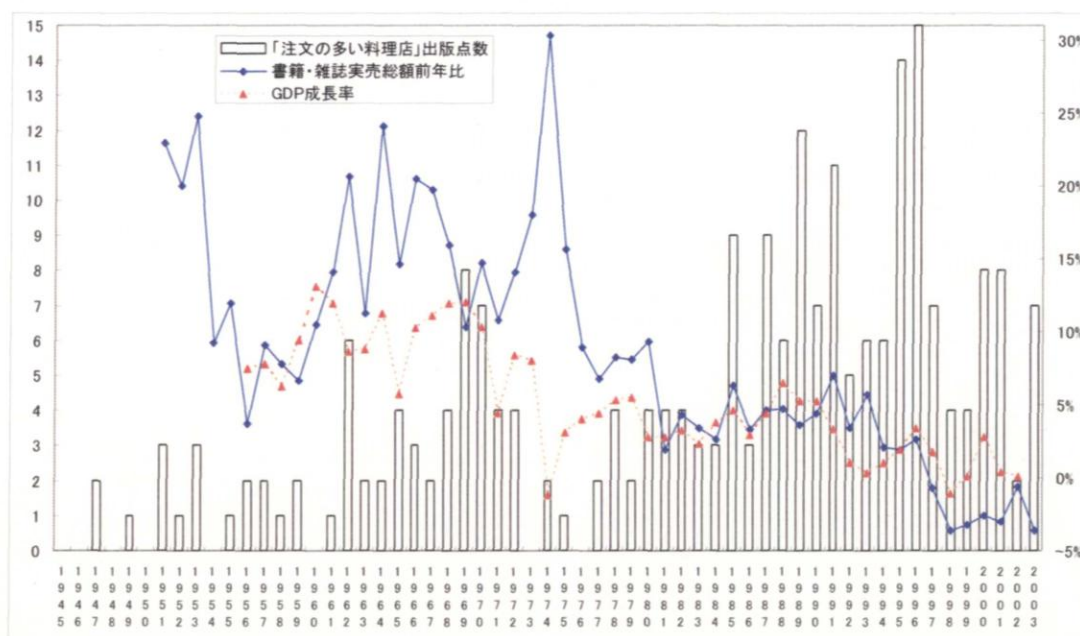


＜図 7-2：宮沢賢治作品出版総数の推移＞

図 7-2 では、折線で宮沢賢治による全ての著作の出版総数の推移を示した。宮沢賢治作品出版総数の推移を[99]掲載の「=作品（詩集・童話・絵本など）=」に依拠し一部修正を施したデータから作成した。右側の数値目盛りで示した出版総数では、1948年、1956年、1985年、1996年にそれぞれ過去を上回る点数の出版物があった。「注文の多い料理店」

出版点数と宮沢賢治作品出版総数との相関係数は、0.76であった。図7-1と比較すると、1970年代半ばに低迷期があること、著作権保護期間満了後に出版点数が急激に伸びていること、生誕100年にあたる1996年に過去最高の出版点数があったことが共通する。

また、図7-3は景気動向及び出版業界全体の動向と「注文の多い料理店」の出版状況に対比するために[127]掲載のデータに基づき作成したものである。出版業界は、景気に左右されない独自の動向を示すとされていたが、それはGDPと書籍雑誌実売総額前年比との相関係数が0.15であった1975年までであり、書籍雑誌実売総額前年比が一桁となる1976年以降は相関係数も0.66となりGDPの成長率とそれほど変わらなくなっている。特に1996年以降は連続してマイナス成長となっており、「出版に不況無し」という標語はもはや通用していない。「注文の多い料理店」の出版状況の変化とGDPとの相関係数は-0.26、書籍雑誌実売総額前年比とは-0.41である。数値としては相関有と判定することも可能だが、1974年のGDPマイナス成長や同年の書籍雑誌実売総額前年比の異常増加等個別の事象を反映することは不可能であった。ただし、1996年に関しては10大ニュースの中に「宮沢賢治生誕100年、関連書一斉に出版。常設コーナーも」と記されており、出版業界の動向の中でも注目される現象となっていたことが分かる。



<図7-3：経済指標との対比>

このように増減傾向の矛盾や個別事象を反映させるため、表 7-2 に宮沢賢治の生誕や回忌、社会状況をも含めた受容史をまとめる。まず、生誕・回忌と全集発行には強い相関がある。一周忌あるいは3回忌に符合する「文圃堂版全集」をはじめとして、生誕 100 年に合わせた「新校本」まで、当該年あるいは1年を前後して出版が開始されている。

宮沢賢治は、生年（1896）と没年（1933）の関係から、回忌と没後及び生誕の各周年が連続することがある。回忌は数え年、没後・生誕は満年で、加えて著作権保護期間は死亡年月日の翌年元旦から起算することになっており、各年の設定には注意が必要となる。好不況とも連動しており、特に1964年からの高度経済成長期、二次にわたるオイルショック、バブル経済期における増減傾向は顕著である。バブル経済期は、著作権保護期間の満了（1983年）の直後に始まるので出版点数も著しく伸びている。この時期がいかにバブルであったのかは、崩壊直後の低迷ぶりからも明らかであり、1994年には1980年代前半の水準にまで落ちている。ところが、前述したように1996年の生誕100年は特異点となった。

記述が前後するが、「校本全集」（1973年）と「新修全集」（1979年）はそれぞれ第一次と第二次のオイルショックの年に刊行開始となっている。この景気低迷期は、出版傾向も点数、表現形態の多様性と質量ともに低迷している。しかしながら、二つの全集はバブル経済期に出現する出版物の底本とされており、この時期は変化の多様性を迎えるためにテキストを安定させた雌伏の時期と考えることができる。高度経済成長期の出版状況も同じように「31年版全集」が牽引して様々な出版物の底本となっはいるが、戦中・戦後期におけるテキストの混乱を引き摺っていることが異なる点である。この点に関しては検閲問題と関連させて後述する。

「注文の多い料理店」の受容史を概観すると以下のようなになる。高度経済成長期には絵本をはじめとする書籍とアナログ方式による映像や音声の表現形態が出現している。景気低迷期に入ると、多様な表現形態は少なくなり、バブル経済期に多様性が復活し世相を反映するようにバインダー式のシステム手帳に挟んで読書するための「リフィル」が出現している。「IT革命」期には、CDやCD-ROMに代表されるデジタル方式による表現形態、インターネット上でコンテンツを配布するWebページが出現した。この時期には他に、視覚や聴覚にハンディキャップを持つ人々のために配慮した表現形態が現れていることも大きな特色である。

<表 7-2 : 受容史>

	西暦	社会	宮沢賢治	出版状況	表現形態初出
戦前期	1924		28 歳	初版本童話集	左記に収録
	1934		一周忌	(文圃堂版全集)	
	1935		3 回忌		
戦中・戦後期	1939		7 回忌	十字屋版全集, 羽田書店版名作選	名作選に収録
	1940				十字屋第 4 巻
	1945	9 月 GHQ 検閲開始	13 回忌		
	1946		生誕 50 年	(組合版文庫)	
	1949	10 月 GHQ 検閲終了	17 回忌	新潮文庫, (珠玉選)	
	1951	日米安保条約			戯曲
高度経済成長期	1955		23 回忌		
	1956	「もはや戦後ではない」	生誕 60 年	筑摩 31 年版全集	左記第 7 巻
	1958			筑摩普及版全集	
	1959	岩戸景気	27 回忌		普及版第 7 巻, 人形劇映画
	1964			岩崎書店童話全集	左記第 4 巻, 翻案絵本
	1965		33 回忌		
	1966	いざなぎ景気	生誕 70 年		紙芝居
	1967			筑摩 42 年版全集	英訳
	1968				42 年版第 8 巻
	1969		37 回忌		
	1970	大阪万博			翻案朗読カセット, ラジオドラマ
	1971	ドルショック 小学校学習指導要領改訂施行(現代化)			絵本, 童話集, 朗読レコード
景気低迷期	1973	第一次オイルショック	没後 40 年	校本全集	
	1974				校本第 11 巻
	1975	家庭用ビデオ発売	43 回忌		
	1976		生誕 80 年		

景気低迷期	1977				小学校教科書
	1978	日中国交回復		岩崎書店童話全集新版	左記第4巻
	1979	第二次オイルショック 「ウォークマン」発売	47回忌	新修全集	
	1980	小中学校学習指導要領改訂施行(ゆとり)			新修第13巻
	1981				中学校教科書
	1982		50回忌		
	1983		没後50年	著作権保護期間満了	コミック, 朗読カセット
バブル経済期	1985	プラザ合意		ちくま文庫版全集	
	1986		生誕90年		文庫版第8巻, 豆本
	1988				リフィル
	1989	消費税導入			3D人形アニメ
	1990	バブル経済崩壊			朗読ビデオ
「IT」革命「期	1991				朗読CD, セルアニメ
	1993		没後60年	(ファミコン・ソフト)	
	1995	Windows95 発売		新校本全集	左記第12巻, CD-ROM, ハリアワ-アニメ
	1996		生誕100年		大活字版
	2000				手話ビデオ
	2001				自主制作アニメ
	2003		没後70年		新聞連載

7-4 テクストの構造〈地図〉

原テキストのあらすじは、図 6-4 として既に示したが本節での検討にも必要なため、図 7-4 として再掲する。

また、このテキストの構造は、6-4 節の表 6-3 に示した。本節では、テキスト全体の骨格を構成する要素を抽出するために同一文や同一語の反復及び出現頻度に着目する。6-3 及び 6-4 節で既にこの手法によって原テキストの論理構造を抽出している。

都会から狩猟に来た二人の若い紳士が、山奥で道に迷い、腹をすかせて、忽然と現れた一軒の西洋料理店「山猫軒」に飛び込む。ところがなかには、奇妙な注文を記したいくつもの扉と長い廊下が続くばかり。やがて二人は自分たちが料理されるために店主から注文を受けていたことに気づき、危機一髪で犬と猟師に救われたが、恐怖で紙くずのようになった顔だけは決してもとに戻らなかった。(宮沢賢治の全童話を読む、國文学臨時増刊、學燈社、2003.)

<図 7-4：専門誌に掲載された人手による要約（再掲）>

テキスト中で反復される「注文」は、その周辺の文とともに以下のようなシーケンスを構成している。

【注文はずいぶん多いでしょうがどうかいちいちこらえてください。】(73) (注文 4)：注文

「これはぜんたいどういうんだ。」ひとりの紳士は顔をしかめました。(74, 75)：疑問

「うん、これはきっと注文があまり多くて、支度が手間取るけれどもごめんくださいと、こういうことだ。」(76)：解釈

「そうだろう。」(77)：納得

このように、山猫軒の扉に記されている「注文」を登場人物の「二人の紳士」が勝手に解釈してそれに従うことで物語が展開されている。「注文」理解には明らかな差異が認められる。

【お客さま方、ここで髪をきちんとして、それからはきものの泥を落としてください。】(82)(注文 5)

「これはどうももっともだ。僕もさっき玄関で、山のなかだと思って見くびったんだよ」(84, 85)

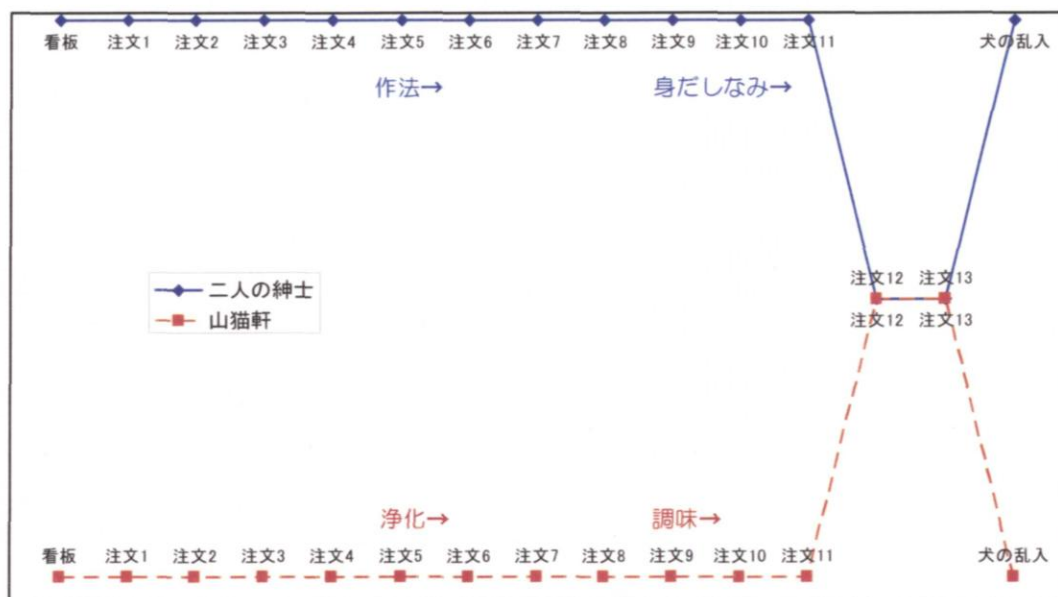
「作法の厳しい家だ。きつとよほど偉い人たちが、たびたび来るんだ。」(86, 87)

そこで二人は、きれいに髪をけずって、靴の泥を落としました。(88)

上記の「注文」で山猫軒側の意図は食材の浄化であるが、二人の紳士は客の作法と解釈しそれを実行している。つまり、注文通りの成果が得られたということになる。続いて注文 6 から 8 では食材の無害化と異物の排除が意図されるわけだが二人の紳士は作法の徹底と解釈する。注文 9, 10 はクリーム、11 では酢による調味なのだが、二人の紳士は身だしなみとして受け容れる。そしてついに注文 12 で塩を振ることになり、山猫軒の意図と二人の紳士の解釈が一致する。

【どうかからだ中に、壺の中の塩をたくさんよもみ込んでください。】(156) (注文 12)

「だからさ、西洋料理店というのは、ぼくの考えるところでは、西洋料理を、来た人に食べさせるのではなくて、来た人を西洋料理にして、食べてやる家とこういうことなんだ。」(161)



<図 7-5：注文理解をめぐる差異とその解消>

既に 6-3 節でテキストの因果関係からこの構図を示したが、この段階になってようやく差異は解消され、危機が露見することとなる。これまでに述べた差異の経緯を図 7-5 のようにまとめることができる。

7-5 初期刊本の校異<樹状図>

「注文の多い料理店」のテキストにおける初版以来の表記の揺れに関しては、秋枝による詳細な校訂が行われている[4]。また、GHQ による検閲がこのテキストに与えた影響に関しては、谷による研究報告がある[135] [136] [137]。秋枝の研究は、初期刊本のテキストを比較したもので、ある指標において同一の校異がある刊本は明らかになるが、指標相互の共起関係までは示していない。一方で谷の研究は、刊本による検閲や自己規制の痕跡からテキストの復元までも明らかにしようとしたものであるが、検閲箇所という単一の指標を用いているために他の校異との関連に触れていない。そこで、両者の業績を踏まえて独自の検討を行う。秋枝が示した指標に谷が明らかにした検閲箇所を加えて各刊本のテク

ストを比較し、時系列変化の他に校異の共起関係を明示する。

まず、「注文」が刊本の中でどのように記されているか、使用されている括弧の形状に着目して表 7-3 に示したように分類して番号を付した。表に示した分類番号のうち、ここでは 2, 3, 4 について検討する。1 の形状は、初版本（1924）以降に杜陵書院版（1947）を除くと 31 年版全集（1956）まで使用されていない。また、5～8 については実例が 1～3 点と少なく、しかも翻案などを含むために対象から外した。

＜表 7-3：「注文」が記されている括弧の形状分類＞

カテゴリー	括弧の形状	初出(年)
1	「J(G)	初版本(1924)
2	【】(A)	十字屋版全集(1939)
3	『』(C)	羽田書店版名作選(1939)
4	〔〕(T)	東洋書館版(1952)
5	◇	実業之日本社版(1969)
6	《》	早川書房版(1970)
7	括弧無し字体変更	キンダーおはなしえほん(1970)
8	“”	おはなしチャイルド(1975)

次に、テキストの校異に関して、表 7-4 のような指標を付した。表中の「指標」欄において数字は秋枝による校訂作業で使用されたものである。各指標のうち右端列上部に記した記号すなわち ACEGIK が、新校本の指標配列となる。

以下では、表 7-3 に基づいてカテゴリー化した初期刊本のテキストを表 7-4 の指標に基づいて分析する。同一書名であっても版や刷によってテキストが異なる場合があるので、可能な限り現物あるいはコピーを参照して詳細な検討を行った。なお、表 7-5～7-7 において指標のうち「検閲」を「検」、「注文」の括弧によるカテゴリーの番号を「注」と記す。また新仮名遣いのテキストには、掲載書籍名の前に「*」印を付した。

括弧の形状として「【】」が選択されているカテゴリー 2 における最初の刊本は、表 7-5 に示したように十字屋版全集である。この分類の特徴は、特に検閲期のものは指標 61 を除く全ての指標に校異が共起するものが多いことである。もっともこれは十字屋版全集の特徴であるが、筑摩書房版小学生全集でも新かなに改めながら継承されている。

＜表 7-4：テキスト分析の指標＞

指標	語句	表記号	変換	
検閲	すっかりイギリスの兵隊のかたちをして、	表記有	A	A
		表記無	B	T
11	ところがどうも困ったことは、	C	C	
	ところがどうも困ったことには、	D	G	
43	手に塗って	表記有	E	A
		表記無	F	T
53	もうものが言えませんでした。	G	G	
	もうものが見えませんでした。	H	T	
61	くるくる廻っていましたが、	I	C	
	くるくると廻っていましたが、	J	T	
63	二人は寒さに	K	T	
	二人は寒さうに(さむそうに)	L	A	

なお、新版小学生全集は今回使用した指標から見ると検閲期の十字屋書房版の影響を強く受けているものであるが、既に谷も指摘しているように、同じ筑摩書房から31年版全集が刊行された後でも検閲による削除措置該当部分を含めて旧版のテキストを継承し、本研究において収集した資料のうち最も遅くまで検閲による爪痕を残している。

谷による前掲研究の発表当日配布資料によると、GHQによって削除命令を受けたのは、「宮沢賢治全集第四巻（童話集中編）十字屋書店 1946年3月・2版」となっている。また同資料には、「『宮沢賢治全集第四巻』3刷（ママ）は、1948年12月刊行。2版と同じに指示部分は削除して出版されている。」とある。

これらとは別に書籍の現物を確認した十字屋版全集第三版の発行年月は、「昭和28(1953)年11月」で、この版の奥付に記されている初版は「昭和14(1939)年7月」であった。装丁は、茶色の厚紙に甲虫のイラストが箔押しされている。また、同じく現物を確認した第二版の発行年月は、「昭和22(1947)年3月」で、この版の奥付に記されている初版は「昭和15(1940)年3月」、装丁は白背の厚紙で紙のカバー中央部に茶色で甲虫のイラストが描かれている。なお谷は、研究発表と同名の論文で十字屋書店版の宮沢賢治全集第四巻「第2版」

の刊行日を「1947.3.1」と改めている。

<表 7-5 : カテゴリー 2 の分析>

指標							掲載書籍	出版社	出版 年月
検	11	43	53	61	63	注			
A	D	F	H	I	L	2	A 宮澤賢治全集第 4 巻 初版	十字屋	1940.03
B	D	F	H	I	L	2	A 宮澤賢治全集第 4 巻(初版 1940.03)第 2 版	十字屋	1947.03
B	D	F	H	I	L	2	少年のための純文學選 カイロ團長	櫻井書店	1947.05
B	D	F	H	I	L	2	A 宮澤賢治全集第 4 巻(初版 1940.03)第 3 版	十字屋	1948.12
B	D	F	H	I	L	2	少年のための純文學選 カイロ團長 重版	櫻井書店	1950.01
A	D	E	H	I	K	2	童話集銀河鉄道の夜 他十四篇(岩波文庫)	岩波書店	1951.10
B	D	F	H	I	L	2	* 風の又三郎 小学生全集 35	筑摩書房	1953.06
A	D	E	H	I	K	2	昭和文学全集 14	角川書店	1953.06
A	D	E	H	I	K	2	* 文芸童話集 世界少年少女文学全集 30 日本編 3	東京創元社	1953.09
A	D	F	H	I	L	2	B 宮澤賢治全集第 4 巻(初版 1939.07)第 3 版	十字屋	1953.11
A	D	E	H	I	K	2	注文の多い料理店 角川文庫 初版	角川書店	1956.05
A	D	E	H	I	K	2	* 日本文芸童話集 (世界少年少女文学全集 23)	河出書房新社	1962.05
B	D	F	H	I	L	2	* 風の又三郎 新版小学生全集 34	筑摩書房	1962.09
A	C	E	G	I	K	2	* 童話集銀河鉄道の夜 他十四篇(岩波文庫)	岩波書店	1966.07
A	D	E	H	I	K	2	* 幼児に聞かせたいお話 12 か月 第 3 巻	ひかりのくに	1968.04
A	C	E	G	I	K	2	* 注文の多い料理店 森本三郎・画	紫紅会	1988.10
A	C	E	G	I	K	2	* 宮澤賢治童話 注文の多い料理店 森本三郎・画	たくみ書房	1989.04

以上から十字屋版全集は、奥付によると「昭和 14 年 7 月初版」と「昭和 15 年 3 月初版」が存在することになる。装丁の形状から前者を「十字屋茶背」（表 7-5 では書籍名の前に記号「B」を付す）、後者を「十字屋白背」（表 7-5 では書籍名の前に記号「A」を付す）と呼ぶことにする。ただし、「茶背」も「白背」も版面は同一であり、頁割も変わらない。検閲によって削除が始まったのが谷の指摘による「白背」第二版（1947 年 3 月）とすると、十字屋書店による刊本は、遅くとも「茶背」第三版（1953 年 11 月）ではテキストが復元さ

れていたことになる。

カテゴリー2のテキストが安定するのは、1966年の岩波文庫である。河出書房版は、東京創元社版と同一の版組を使用しているが、検閲部分を除いた校異は1968年のひかりのくに版まで続いている。また、1989年のたくみ書房版は絵本で、このカテゴリーに属するテキストは以降刊行されていない。

カテゴリー3は、括弧の形状として「『』」を使用しており、表7-6に示したように検閲箇所を除けば指標61にのみ特徴を有する。谷の発表当日配布資料によると、GHQによって削除命令を受けたのは、「宮沢賢治名作選 上 杜陵書院1946年5月」となっている。谷は検閲終了後も削除したまま出版されていたものとして「宮沢賢治名作選 上 杜陵書院1950年12月」を挙げている。表中では「名作選」11刷と14刷に対応する。

『宮沢賢治名作選』は同じ書名と版組で一巻本、二巻本、三巻本が出版されている。奥付から見ると、こうした書誌の相違に関係なく発行年月に対応して刷数を増やしている。ところが、表中に記した「12刷」（3巻本の上巻）では、11刷（3巻本の上巻）で検閲により削除指示を受けた部分が復元されている。一方で13刷（2巻本の上巻）では削除されている。3巻本『宮沢賢治名作選』は上中下の各巻ごとに刷数が異なっていることから、さらに書誌の相違など検討すべき点は多いが、削除部分の無い「12刷」の存在を確認した。

また、表7-6に掲載した2種類の『鑑賞 宮澤賢治選集』についても触れておく必要がある。公開されて一般的な書誌カタログにおいて、この書名の出版元は「天明社」で、同出版社の本社所在地は神奈川県横須賀市となっている。ところが、本研究における資料収集作業によって同一の版型と装丁を用いた「天明社」版の存在を確認することができた。奥付を比較すると、「天明社」時代の東京出張所が「天明社」本社所在地となっている。「天明社」版は奥付こそ貼換えられているが、扉頁の出版社名は「天」の印字を部分的に削り取って「大」としているものであった。

カテゴリー3は、こうした混乱があるものの検閲・自主規制期を過ぎると括弧の形状を除いて事実上校異が無くなる。三十書房版とあかね書房版は同一の版型で、講談社版は絵本である。従って指標61の校異が存在しなくなるのは、31年版全集（1956年）以降と考えられる。なお、1971年の国土社版がこのカテゴリー最後の事例であるが、これは他のテキストには無い指標43の校異を唯一有している。

<表 7-6 : カテゴリー 3 の分析>

指標							掲載書籍	出版社	出版 年月
検	11	43	53	61	63	注			
A	C	E	G	J	K	3	宮沢賢治名作選(1巻本) 第1刷	羽田書店	1939.03
A	C	E	G	J	K	3	宮沢賢治名作選(1巻本) 第5刷	羽田書店	1940.11
A	C	E	G	J	K	3	宮沢賢治名作選(1巻本) 第7刷	羽田書店	1941.02
A	C	E	G	J	K	3	グスコー・ブドリの傳記 第1刷	羽田書店	1941.04
A	C	E	G	J	K	3	グスコー・ブドリの傳記 第2刷	羽田書店	1943.03
B	C	E	G	J	K	3	宮沢賢治名作選 上(3巻本)第11刷	羽田書店	1946.05
A	C	E	G	J	K	3	宮沢賢治名作選 上(3巻本)第12刷	羽田書店	1946.07
B	C	E	G	J	K	3	グスコー・ブドリの傳記(刷表記無し)	羽田書店	1947.12
B	C	E	G	J	K	3	鑑賞 宮澤賢治選集	天明社	1949.05
B	C	E	G	J	K	3	宮沢賢治名作選 上(2巻本)第13刷	羽田書店	1949.06
B	C	E	G	J	K	3	グスコー・ブドリの傳記 第10刷 PTA 文庫	羽田書店	1950.03
B	C	E	G	J	K	3	宮沢賢治名作選 上(2巻本)第14刷	羽田書店	1950.12
B	C	E	G	J	K	3	鑑賞 宮澤賢治選集	大明社	1951.05
A	C	E	G	I	K	3	* 宮沢賢治集 新日本少年少女文学全集	ポプラ社	1958.10
A	C	E	G	I	K	3	* 銀河鉄道の夜 日本童話名作選集 14	三十書房	1962.02
A	C	E	G	I	K	3	* 銀河鉄道の夜 日本童話名作選集 14	あかね書房	1965.08
A	C	E	G	I	K	3	* 注文の多い料理店 (日本の名作)	講談社	1971.01
A	C	F	G	I	K	3	* 日本子どもの文学・6年生	国土社	1971.04

表 7-7 に示したようにカテゴリー 4 は、括弧に「()」を使用するものだが、指標からカテゴリー 2 と同一の傾向にあると考えられる。東洋書館版は、谷が指摘するように検閲期が終了しても削除したまま出版された事例の一つであるが、三一書房版も該当箇所は削除されている。削除版の最後は、前述した通りであり谷の指摘と相違ないが、ここに削除命令による影響の事例を一つ加えることができる。

<表 7-7 : カテゴリー 4 の分析>

指標							掲載書籍	出版社	出版 年月
検	11	43	53	61	63	注			
B	D	F	H	I	L	4	*セロひきのゴーシュ	東洋書館	1952.10
B	D	F	G	I	L	4	*日本児童文学大系(2)重心文学の開花	三一書房	1955.08
A	C	E	G	I	K	4	*どんぐりと山ねこ(子ども図書館)谷内六郎・絵	大日本図書	1968.01
A	C	E	G	I	K	4	*文学読本『はぐるま』8	部落問題研究所	1974
A	C	E	G	I	K	4	*注文の多い料理店(日本の童話名作選)島田睦子・画	偕成社	1984.06
A	C	E	G	I	K	4	*新・文学の本だな中学年1へびだれもしらない	国土社	1985.04
A	C	E	G	I	K	4	*新訂文学読本『はぐるま』7	部落問題研究所	1990.06
A	C	E	G	I	K	4	*注文の多い料理店(新版子ども図書館)佐藤国男・絵	大日本図書	1993.10

検閲による削除も表層的な検討によって他の指標と比較してみると、局所的な現象であることが明らかになる。ここまで示した分析の結果からは、各刊本の参照状態などを類推することは可能だが、関係の全て明らかにして刊本の親子関係を特定することはできない。

<表 7-8 : 「木の葉」ルビの相違>

掲載書籍	出版社	出版年月	校異	記号	「木の葉」ルビ	記号
イーハトヴ童話注文の多い料理店	杜陵出版部	1924.12	そつが	T	きのは	A
宮沢賢治名作選 初刷	羽田書店	1939.03	そいつが	C	無し	G
イーハトヴ童話注文の多い料理店	杜陵書院	1947.10	そつが	T	きのは	A
角川文庫版 注文の多い料理店	角川書店	1956.05	そいつが	C	「は」のみ	C
宮沢賢治全集第8巻	筑摩書房	1956.10	そいつが	C	無し	G
少年少女日本文学全集 10	講談社	1962.01	そいつが	C	このは	T
校本宮沢賢治全集第 11 巻	筑摩書房	1974.09	そいつが	C	きのは	A
新修宮沢賢治全集第 13 巻	筑摩書房	1980.03	そいつが	C	無し	G
新校本宮沢賢治全集第 12 巻	筑摩書房	1995.11	そ[<u>l</u>]つが	A	きのは	A

[131]は、文学テキストを音声によって豊かに表現するのが朗読だとして、ポーズやリズ

ム、アクセントについて表現する手法に結びつく分析を行っている。原テキストと朗読の関係进行分析の際には、朗読者によって異なるポーズを比較することが考えられる。本研究でも予備実験として波形分析を行ったが、息継ぎ等朗読者の肉体的特性による差異があるためか、有意な傾向を得ることはできなかった。そこで、ここでも表層的なテキスト分析から音声データの検討を行った。原テキストは、以下のような書き出しとなっている。

「二人の若い紳士が、すっかりイギリスの兵隊のかたちをして、ぴかぴかする鉄砲をかついで、白熊のような犬を二足つれて、だいふ山奥の、木の葉のかさかさしたとこを、こんなことを言いながら、あるいておりました。」⁽¹⁾

この中の「木の葉」は表 7-8 に示したように、刊本によってルビが異なる。初版本で振られていた「きのは」というルビは、同書の戦後復刻版を除くと 1974 年の校本全集までこれを用いている刊本が存在しなかった。一方で学校文法に適った「このは」という読みを明記するルビは、1962 年の講談社版で採用されている。ところが校本以降でも様々な流布本が底本としている新修全集は、ルビを振っていない。このようにして、「きのは」「このは」「ルビ無し」が乱立するようになる。

活字を用いる表現方法では、この部分にルビを振らないという手法を用いることができるが、テキストを音によって伝達する場合には「きのは」なのか「このは」なのか明確にせざるを得ない。以下では、朗読による相違を検討してみる。

原テキストの朗読が録音資料としてアナログ・レコードで公表されたのは 1971 年であった。以降 2003 年末までにカセットテープや CD によって、また VHS ビデオによる映像を伴う朗読を含めると計 28 点 24 種類の朗読がある。このうち 3 点は翻案であり、外国語の 2 点もあるので、原テキストに対応するのは表 7-9 にまとめた 19 種類である。

なお、米倉齊加年の朗読は表に掲載したように当初 18cmLP に収録されていたが本体書籍が合本となったことに伴い 1987 年には収録媒体がカセットテープとなっている。同様に朗読原盤が同一で媒体や編成が変化したものに、滝田裕介（1995 年 CD、2003 年新編成 CD）、加藤剛（1989 年カセット、2001 年 CD）の朗読がある。加藤の朗読には、新旧ともに別の特徴がある。

〈表 7-9：朗読における「木の葉」〉

媒体	朗読	収録盤等の題名	出版社	出版年	読み
18cmLP	米倉斉加年	『宮沢賢治童話集 I』付録レコード	中央公論社	1971	このは
カセット	滝田裕介	怪談傑作集 1(最初期編成カセット)	東芝 EMI	1983	このは
カセット	長岡輝子	長岡輝子, 宮沢賢治を読む 第 1 巻(カセットブック)	草思社	1987	きのは
カセット	加藤剛	新潮カセットブック 33	新潮社	1987	このは けだもの
カセット	池水通洋	朗読ライブラリー 宮沢賢治作品集第 2 巻	東京エーヴィ センター	1989	このは
カセット	渡辺小百合	児童文学カセットブック 2	リブリオ出版	1989	このは
カセット	名古屋章	カセット版日本おはなし名作全集 12	小学館	1989	きのは
VHS	久米明	ビデオ文学館 12	毎日 EVR システム	1990	きのは
CD	長岡輝子	長岡輝子, 宮沢賢治を読む 第 1 巻(CD ブック)	草思社	1991	きのは
CD	サウンド・ドラマ	新児童文学の世界第 1 集 5	バンダイ ME	1992	きのは
CD	サウンド・ドラマ	日本名作絵本 CD14	TBS プリタニカ	1993	このは
CD	柄本明	宮沢賢治の世界 4	東芝 EMI	1996	このは
CD-ROM	風間杜夫	画本宮沢賢治 CD-ROM	ジャストシステム	1996	このは
VHS	千葉裕子	名作ビデオ絵本 15	毎日 EVR システム	1998	きのは
CD	江守徹	Sounds in Kiddyland (Series 27)	ラボ教育センター	1998	きのは
CD	篠原大作	別冊太陽 112 読み語り絵本 100 付録 CD	平凡社	2001	きのは
CD	長岡輝子	宮沢賢治の魅力 1 注文の多い料理店	キング レコード	2001	きのは
CD	小林恭治	みんなと学ぶ小学校国語 5 年 教師用指導書	学校図書	2002	このは
CD	谷口秀子	風と雲とまるめろ 花巻弁による宮沢 賢治を読む, 語る	冬花社	2003	このは

「ぜんたい、ここの山は怪しからんね。鳥も獣も一疋も居やがらん。なんでも構わないから、早くタンタアーンと、やってみたいもんだなあ。」(2, 3, 4)

加藤は、上記テキストのうち「獣」を「けだもの」と発音している。これは、朗読媒体の発行元である新潮社のテキストに由来するものである。新潮文庫の旧版にあたる異聖歌編の『風の又三郎 宮沢賢治童話集（上）』（1961）にはこの部分に「けだもの」とルビが振られている。また、表に掲載しなかった『ポニーキングダムカセット 世界の名作童話2』（ポニー、1970）については、既に6-6節で触れたが、「木の葉」箇所は脚色されていて該当しない。同じく表に掲載しなかった朗読に『どンドン読めるいろいろな話』（武蔵野書院、1991）のカセットテープ（山中勇・朗読）がある。これにも発音該当箇所は無い。

さらに、風間杜夫の朗読は小林敏也によるイラストに依拠するものであるが、表7-10にまとめたように表現形式により発音やルビに揺れがある。

<表 7-10：同一作者同一素材における相違>

掲載書籍	出版社	出版年	指標
画本宮沢賢治 注文の多い料理店	パロル舎	1989	このは
賢治草紙	パロル舎	1995	きのは
画本宮沢賢治 CD-ROM	ジャストシステム	1996	このは

また、長岡輝子の朗読は3種類あるが、発行年が異なるのみでなく背景音の有無などをはじめとして演出も別個のものである。

朗読には上記のような事情があるものの、これまで発表されたものを整理すると表のように19種類となる。「木の葉」を比較すると、19種類の朗読の中で「きのは」と発音しているのは9、「このは」は10であった。

ルビが明記されている刊本は、原テキストと同名の童話集（1924年）以降は、校本全集（1973年）まで確認できていない。また、新修全集（1979年）ではルビが外されており、新校本（1996年）でルビが戻っている。1997年以降の朗読は、1点を除き「きのは」と発音している。従って発音の揺れは、朗読の際に依拠した全集テキストによる影響が一因と考えられる。

ただし、学校文法と原テキスト校訂の間には明らかな矛盾がある。原テキストは、小学

校 5 年生の国語教科書に採録されている。教科書にルビは振られていないが、教師用資料の CD に収録された朗読は「このは」と発音している。

＜表 7-11：各刊本指標の多重配列化＞

カテゴリー	刊本	配列
1	初版本	A C A G C T G A T T
	校本	A C A G C T G A C T
2	十字屋初版	A G T T C A A G C T
	十字屋2版	T G T T C A A G C T
	岩波文庫旧版	A G A T C T A G C T
	小学生全集	T G T T C A A G C A
3	羽田初刷	A C A G T T C G C T
	羽田 11 刷	T C A G T T C G C T
	ポプラ社版	A C A G C T C G C A
4	東洋書館版	T G T T C A T G C A
	三一書房版	T G T G C A T G C A
	大日本図書版	A C A G C T T G C A

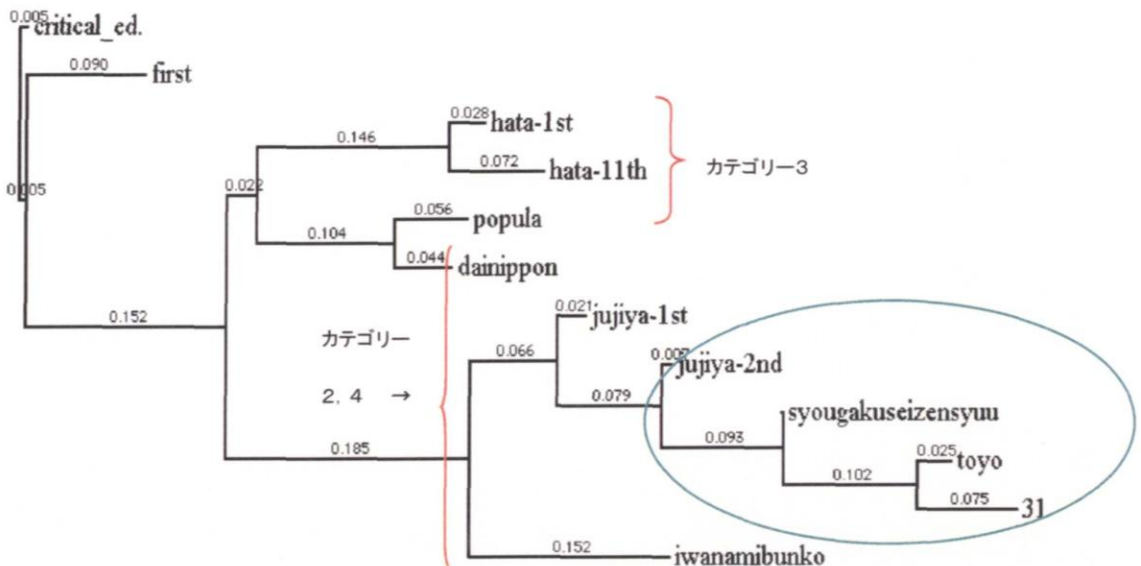
そこで、7つの指標に加えて、「木の葉」ルビ、「そつ」又は「そいつ」、仮名遣いの新旧相違、の3点を新たな指標に加えた。「木の葉」ルビについては、分類し表 7-9 及び 7-10 にまとめているが、これは声に出して読むための指標である。これに「木の葉の「は」のみにルビ」というように発音では峻別不可能な事例を加えると、表 7-8 のような四種類の分類が可能になる。また「そつ」又は「そいつ」指標は、誤植の多い初版本の中でも最も特徴的なものである。合計 10 の指標を表 7-11 に示したように 4 値に置換して多重配列を作成し、国立遺伝学研究所生命情報 DDBJ センター(<http://www.ddbj.nig.ac.jp/>)の CLUSTALW によって各配列の距離を計算した。

なおここでは、4 値であることのみを重視した。記号は一対一対応とはなるが、指標からの変換は恣意的なものである。2 値ではバリエーションとして少ないので、記号処理の方法論として遺伝子の 4 値という扱い方に依拠した。

ここで得た結果を、樹状図作成ソフト DendroMaker によって作図したものが図 7-6 である。このツールはルート要素の位置を変更することができるので、校本をルートとして作図した。

カテゴリ 2 と 4、カテゴリ 3 がそれぞれ分離してプロットされている。また、楕円で強調したように、検閲あるいは自主規制によって削除されたテキストが類縁性の高いものとして表示できている。さらに、テキスト群をまとめているばかりか、テキストの親子関係を示すこともできる。

一方でカテゴリを区別することは、一つの刊本「dainippon」（大日本図書版）についてのみであるが失敗している。このようにテキストの校異を DNA 配列として記号化することでテキストを生物として位置づけることは、民話研究などに一部は導入されている [110] が、本研究では 7-6 節において「フローティング・ハイパーテキスト」としてハイパーテキストと関連付け、8-2 節において「論理構造の乗り物」として概念整理を行う興味深い実験的な視座として発展させることができる。しかしながら、ゲノム解析に用いられているツールをそのまま適用可能であるか否かは、なお慎重な検討が必要であろう。



<図 7-6：刊本テキストの関係を示す樹状図>

7-6 フローティング・ハイパーテキスト

7-3 節で示したグラフは、一つのテキストが時間の経過によってどのように増殖するのか、また表現形態の広がり具合を概観するために作成したものであった。この目的に適ったグラフを一枚に集約することはできていない。地図については、Moretti が地理的なものを用いているのに対して 7-4 節で物語世界の論理マップを描いたにすぎない。これは、物語内部で具体的な地名が挙げられていないテキストを選択したことが最大の理由となる。

[109]は建築家によって文学テキストに記された家屋を見取り図に投影する試みだが、山猫軒の廊下や扉の関係を図面とすることはできず曖昧なイラストで終わっている。

Moretti の樹状図は、推理小説のサブジャンル生成の模様を描いたものである。本研究では、7-5 節で一つのテキストの変容を示した。このように、本来は文学に対するマクロ的アプローチの手法を特定のテキスト研究に用いるためには、なお一層の検討が必要となる。ハイパーテキスト研究の成果から派生するものとして、特にテキスト評釈において従来の文学研究へ寄与するものがあること示したが、以下には展望を示す。

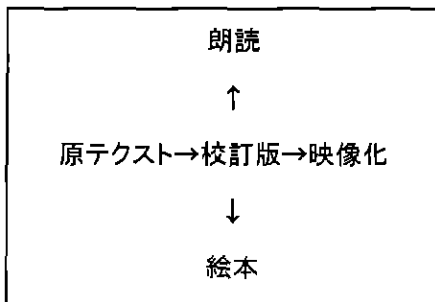
〈表 7-12 : バリアフリーの表現形態〉

形態	題名	製作または出版社	出版年
ビデオ	注文の多い料理店(バリアフリー版)	フォーラム・写楽堂 / T&Kテレフィルム	1995
ビデオ	手話ビデオ手話紙しばい 注文の多い料理店(字幕入り)	社会福祉法人聴力障害者情報文化センター	2000
大活字本	大活字文庫4注文の多い料理店	株式会社大活字	1996
大活字本	大活字文芸選書宮沢賢治2 注文の多い料理店	三心堂	1999

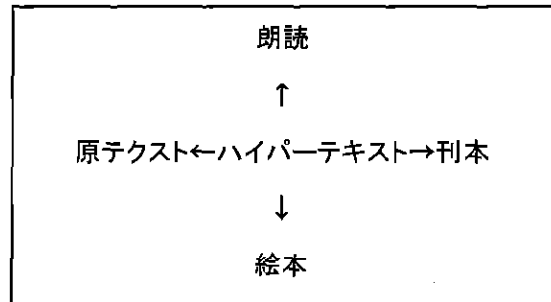
表 7-12 に掲げたのは、視覚障害者または聴覚障害者向きにバリアフリーとした表現形態の「注文の多い料理店」である。既に表 6-2 にも「Web」の範疇として、いわゆる「音訳」ファイルを掲載してある。このように特定の目的を持ったメディア変換は、表現の多様性を求めるものとは別に社会的要請に応えるためのものである。ところが、ビデオ映像のう

ち、どの部分を副音声とするのか、またどの部分を字幕にして説明するのかという点については、経験や勘に頼る極めて恣意的な操作であり、場合によっては音・画像・テキストによる表現が同時に表示されてしまうなど方法論は整備されていない。本研究を進展させることでこうした分野にも、貢献可能であると考えられる。

テキストをめぐる考え方からも導き出される手法として、原テキストからどれだけ離れることができるのか、またどのような変容が可能なのかを探る必要がある。図 7-7 に示したようにこれまでのメディア比較やメディア変換の手法では、原テキストを起点としていた。これは、生原稿や初版本を重視する従来の文献学的研究と同根のものである。そこで、図 7-8 のようにハイパーテキストを全ての比較の基準とする考え方をを用いる。



<図 7-7：従来の考え方>



<図 7-8：フローティング・ハイパーテキスト>

これは、テキストの原点をどこにするかという問題を提起することになる。しかしながら、手稿などのオリジナルを求めるのではなく、「変換」の可能性を徹底して探ることでもある。また、あらゆる変換の原点をテキストとして、その表現形態をハイパーテキストとする。ハイパーテキストは、あらゆる表現形態の中間的な役割を担うべく「中心」に位置するわけである。実証的な手法を崩さずにこのモデルを精緻化するために、まず現段階ではテキストから流布されたものの痕跡を探った。従来の文学研究と一線を画するために、深層に立ち入ることを最大限避けあくまで表層からのアプローチを貫いたわけだが、今後はこの手法を維持しつつ、第 6 章及び第 7 章で試みたテキストから画像または音への変換ルールを獲得、さらにプロップを越えた物語の新たなメタ記述の方法論確立を目指す。